

世界文学を楽しむ会 第7回 フランス文学紀行

10月30日(日) 午後1時30分~3時 アキシマエンシス校舎棟 201号室

世界文学の旅の最終回はフランス文学紀行です。フランスといえば何を連想されるでしょうか。花の都パリ、エッフェル塔、セーヌ川？ それともファッションとかカフェテリア、若い、いや高齢の女性も憧れるロマンスと愛に生きるフランス人の生き方でしょうか。フランスは文化大国として文学の世界でも深い愛にあふれた作品が数多くあります。その中から今回は「本を読むことの面白さ」を目覚めさせてくれたデュマの「三銃士」と、ミュージカルや映画でも深い感動を送ってくれるユゴーの「レ・ミゼラブル」を取り上げてまいります。



『三銃士』の面白さ

フランスの南西部にあるガスコーニュ出身の田舎貴族ダルトニアンは、銃士になることを夢見てパリに出てくる。ところがパリへの道中で謎の騎士に紹介状を盗まれてしまう。挙句、成り行きで銃士隊でも名を馳せる三人衆アトス・ポルトス・アラミスと決闘をする羽目になってしまった。いわゆる日本のチャンバラ劇ですが王族や枢機卿も出てきて血湧き肉躍る冒険の連続です。読む人はきっと「読書好き」になっていくことでしょう。

「One for all, all for one」の正しい意味は？

『レ・ミゼラブル』の感動はどこから？

一切れのパンを盗んだがゆえに19年間の投獄生活を送ってきた主人公ジャン・ヴァルジャンが、食事と宿を提供されたミリエル司教から初めて人間らしい扱いを受ける。でも翌朝、ふとした出来心からチャペルにあった銀の燭台を二つ掠め盗ってしまった。彼を捕えた警察に対して司教は言った。「それはあなたにあげたものなのです。そこにある別の二つの銀の燭台もあげたものになぜ持っていかなかったのですか？」



その場の疑いは晴れたのですが、法と正義感が人生のすべてと信ずるジャヴェール警視の追及は続いていきます。やがてヒロインのコゼットが登場して……。



皆さま、お忙しいなかアキシマエンスまでお越しくださり、ありがとうございます。今回は文学紀行としてのお話しは最後になります。これまで6回、計10作品を取り上げてまいりました。世界文学の旅の最終回はフランス文学紀行です。

数ある作品の中から、ここでは私に「本を読むことの面白さ」を目覚めさせてくれたアレクサンドル・デュマの「三銃士」と、ミュージカルや映画でも深い感動を送ってくれるビクトル・ユゴーの「レ・ミゼラブル」を取り上げてまいります。パソコン操作のためここからは座って話しをさせていただきます。

<着席>

皆さま、フランスといえば何を連想されますでしょうか。花の都パリの凱旋門、芸術的にも美しいエッフェル塔、また優雅に流れるセーヌ川？ それともファッションとかカフェテリア、女性の憧れる、ロマンスと愛に生きるフランス人の生き方でしょうか。いずれにしてもフランスは文化大国として文学の世界でも愛にあふれた感動的な作品が数多くありますが、最初に「面白さ」では群を抜くアレクサンドル・デュマ作の「三銃士」から取り上げてまいります。

『三銃士』の面白さは？

“花の都”パリで

主人公たちの血沸き肉踊る冒険

「三銃士」をお読みになった方はいらっしゃいますか？（挙手を）

『三銃士』（仏語で：Les Trois Mousquetaires レトロワ モスクテール）は、アレクサンドル・デュマによる冒険活劇小説ですね。当時の王族の権力争いがからんだ日本的に言えば出来の良いチャンバラ小説と言えるかもしれません。

主人公ダルタニアンと三銃士たちの胸のすくような活躍。たくらみを抱く枢機卿から王妃を守ろうとする4人の“血沸き肉踊る”冒険と活躍ぶりがたまりません。

登場するのはダルトニアン、アトス、アラミス、ポルトスで計4人なので、厳密には「三銃士」ではありません。しかし銃士になる前の**ダルトニアン**（右から二人目）が**主役**として「三銃士」と出会う形なので、表題が「三銃士」となっているわけです。

そしてこれは『ダルトニアン物語』というダルトニアンの人生を描いた物語の第一部であり、三銃士と共に過ごしたダルトニアンの青春を描いているからです。

偶然ですが、私が今、学習支援員として通っている瑞雲中学校の図書館の壁に今週の初め、全国の中学校の図書館に送られた図書案内の1メートル四方ほどのポスターに大きく「三銃士」が「お勧めの作品」として取り上げられています。私自身も中学時代に「三銃士」を読んだことがきっかけで本を読むようになったことを振り返ると“なるほど、やるじゃん”と共鳴したものです。

物語のあらすじです。

地図：フランスの南西部にあるガスコーニュ出身の田舎貴族ダルトニアンは、銃士（いわゆる騎士ですね）になることを夢見てパリに出てくる。ところがパリへの道中で紹介状を盗まれてしまう。挙句、成り行きで銃士隊でも名を馳せる三人衆アトス・ポルトス・アラミスと決闘をする羽目になってしまった。

引くに引けず、ダルトニアンは意を決して決闘に臨んだが、アトスとの戦いを始めた途端に枢機卿リシュリーの護衛士が現れる。当時、決闘は禁じられていた。そこで決闘は中断となり、今度は三銃士と取り締まりの護衛士の戦いとなった。ダルトニアンは三銃士の仲間として護衛士と戦う事を選び、枢機卿派きっての剣客（剣の達人）ジュサクを下して（やっつけて）三銃士側を勝利させた。この事件でダルトニアンは三銃士の仲間入りを果たした上に、国王からも一目置かれる存在となった。

ある日、ダルトニアンは家主ボナシューの依頼で王妃の下着係コンスタンスに恋をし、そこから枢機卿リシュリーの陰謀に陥れられる寸前の王妃の危機を知った。コンスタンスの依頼を受けたダルトニアンはバッキンガム公爵からダイヤの飾り紐を返してもらうため、三銃士とともにイギリスを目指した。

銃士隊はリシュリー枢機卿配下の親衛隊と悉く対立していた。（枢機卿とはカトリック教会において、最高指導者ローマ教皇の助言者たる高位な聖職者

とのことですね) 枢機卿はあらゆる手段を使って王と王妃を操り、権力を得ようとしていたのです。

そんなある日、アンヌ王妃とイギリス貴族のバッキンガム公爵との秘密の恋を嗅ぎ付けた枢機卿は、国王ルイ 13 世の面前でその秘密を暴こうと企む。王妃が国王から贈られた首飾りを公爵へ渡したことを知る枢機卿は、その首飾りを身に着け国王と共に舞踏会へ出席するよう、王妃に勧めたのです。

その首飾りは公爵のいるロンドンにある。そこで王妃の窮地を救うため、侍女のコンスタンスから依頼を受けたダルタニアンと三銃士たちはロンドンへ旅立った。

王妃の首飾りのためにバッキンガム公爵のもとに行こうとする三銃士とダルタニアンをつぶそうと、いたるところでリシュリー枢機卿の手下が罠を仕掛けていた。謎の男と手強い敵がその前に立ちはだかり、最後までハラハラドキさせられる展開。首飾りの返還は成功し、ダルタニアンは最後に近衛銃士隊の副隊長となった、また三人の仲間の銃士もそれぞれの道に進んでいった、というストーリーのおおまかです。

最初に小説を読んだ中学時代から半世紀以上もたった 2012 年の夏、後ほどご紹介するユゴーの『レ・ミゼラブル』の取材と併せて私は作品の舞台パリを訪れました。

作品はいろいろな人が訳していて、『三銃士』のファンも多い。何人かはネットで作品の舞台を写真入りで紹介。パリをセーヌ川の左岸と右岸に分け、ダルタニアンさらにアトス、ポルトス、アラミスの三銃士が住んでいたという下宿まで地図で示しています。

そんな各銃士の住んでいた所まで訪れるのはとても無理なので、私は物語の中で王と王妃、それに枢機卿が駆け引きを繰り広げた主舞台となったルーブル宮殿、それに作者アレクサンドル・デュマと三銃士およびダルタニアンの彫像の立つリュクサンブール公園を訪れてみました。

パリの地図

セーヌ川河畔の広大な敷地に広がるルーブル宮殿のほとんどすべての建物には、その最上部にいたるまで芸術的な彫刻が残されています。現在は美術館となった広場の中心には透明なピラミッド型の建物もありますね。

計 3 枚。(ルーブル宮殿はセーヌ川の右岸にある)

さすがですね。今はルーブル美術館となり展示作品の多さと質を含めて世界

の三大美術館の一つに数えられるようになり、デュマが描いた当時の模様とはかなり変容しているようでした。

こちらリュクサンブール公園の「三銃士の像」です。

1 枚目の写真の高い台の上の椅子にかけている背後姿は作者のデュマで下に座っているのがダルタニアンです。2 枚目はダルタニアンのアップ写真ですね。

ダルタニアンと真反対の面に三銃士が彫られています。

いくつかの翻訳書や解説書をひもといている中に私にピタリのものがありました。角川文庫の竹村猛（たけし）訳『三銃士』の解説に、「東京のドン・キホーテ」を自任する私（清水武）には格別な共鳴を覚えたものです。

そこではこんな風に展開・評論しています。

竹村猛（たけし）の著書とダルタニアンがまたがった馬
ドン・キホーテの旅と風車との戦いのイラスト

今、ダルタニアンの姿をひと筆で描くとしたらまず、18歳のドン・キホーテをご想像願いたい。鎖かたびらも胸当てもつけていない毛織の胴着をまとったドン・キホーテ。それに父親からもらった馬はとんでもない駄馬・・・今様のドン・キホーテが放浪の旅で乗っていた駄馬に乗ったダルタニアン——いかに名騎手であっても、こんな馬にまたがればこっけいな姿にならざるを得ないことは百も承知だった。彼は、父からこの馬を賤別として拝領におよんだときには、深いため息をついたものだった。

このようにセルバンテスの作中人物に、姿ばかりかその心までが生き写しであった。ドン・キホーテは、風車を巨人と見まちがえ、羊の群を軍隊の集団と間違えたが、ダルタニアンは、人の微笑を侮辱と見まちがえ、人の視線をすべて挑戦と思いちがえていた・・・なんて綴っています。

このたぐいまれな性格のヒーローが敵の陰謀をかいくぐり、縦横無尽の活躍をする。面白くてそこから文学少年でもない自分が本を読むようになった。さらにそれは、つもりつもって定年後の「世界文学紀行」へとつながっていったのです。

面白い一書は読者に思いもかけないほどの夢を与え、広げてくれる。私にとってはその典型が『三銃士』だったので。

せっかくなので、一つ覚えて帰っていただきたい物語の中に出てくる言葉をご紹介します。

「One for all, all for one」

決闘の場面で発せられた言葉です。

そもそも、この名言は、日本ではラグビーの精神を表す言葉として有名ですが、元々は、デュマの小説[三銃士]での言葉のようです。一般に「一人は全員のために、全員は一人のために」と訳されているようですが、これは本来の趣旨を伝える訳ではなく、後半の「one」は勝利とか 目的と訳す方が適当だといいます。

本来の意味は、「一人は全員のために、全員は勝利という一つの目的のために」という意味だそうです。一人一人が全員のために責任を果たす人間になる、そしてそんな個人が集まって全員で勝利に向けて一丸となって進んでいく、それが本来の意味だということです。

以上で「三銃士」については終わりますが、ご参考までにデュマで知られているもう一つの作品は「モンテ・クリスト伯」ですね。日本では『巖窟王』の名でも広く知られています。デュマは『モンテ・クリスト伯』も書いた歴史小説家であることも付け加えておきます。

ヴィクトル・ユゴー作 「レ・ミゼラブル」

さて、「三銃士」は前座としてこれから本番の「レ・ミゼラブル」に入りたいと思います。

「レ・ミゼラブル」はほとんどの方が読んでいるか、映画を見たか、あるいは舞台でご覧になっていて”私のレ・ミゼラブル“を心に刻んでいる方もいるかと思います。私なんかよりも、もっと深く読んでいらっしゃる方もいるかと思います。そんな方は後の質問・懇談会の席で本やミュージカル、また映画の感想などを述べていただくと私の話にも深さや拡がり加わってありがたいところです。是非よろしく願いいたします。

以下はフランスから帰国後に書いた私の『レ・ミゼラブル』小論文のタイトルです。

深いヒューマニズムが魂の奥まで揺り動かす

歴史の舞台で人間の善性と悪性の昇華を描く

ロマン主義フランス文学の大河小説「レ・ミゼラブル」。ストーリーのすべて

は知らなくても、物語の最初に出てくる「銀の燭台」の話を聞いたことのない人は少ないでしょう。

一切れのパンを盗んだがゆえに 19 年間の投獄生活を送ってきた主人公のジャン・ヴァルジャンが、食事と宿を提供されたミリエル司教から初めて人間らしい扱いを受ける。でも翌朝、チャペルにあった銀の燭台を二つ掠め盗ってしまった。

彼を捕まえて告発する警察に対して司教（牧師）は次のように言ったのです。「それはあなたにあげたものなのですよ。そこにある別の二つの銀の燭台もあげたものなのに、なぜ持っていかなかったのですか？」

こうして、その場の疑いは晴れていったのですが、法と正義感が人生のすべてと信ずるジャヴェール警視の追及は続いていきます。やがてヒロインのコゼットが登場します。

物語は映画となり国内でもミュージカルとしてたびたび上演され評判を呼ぶことができました。私も都内の劇場で何回か舞台を鑑賞しました。長く衰えない人気は出演者の名演もさることながら、原作が訴える深い、深いヒューマニズムが人間の魂の奥まで揺り動かしてくるからではないか、と感ずるのです。

ちょうど 10 年前の 7 月、私は物語の舞台となったパリへと飛びました。私はまずマレ地区のヴォージュ広場(地図)の一角にあるヴィクトル・ユゴー記念館を訪ねました。古い町並みを残すパリの中でも代表的な歴史地区の一つです。ユゴーが 1832 年から 16 年間暮らしたアパルトマンが 1902 年に改装され記念館になったと聞きました。

3 階建ての館内にはユゴーの青年時代から壮年、そして老年にいたるまでの肖像画や、彼が書き残した作品のオリジナル手書き原稿や初版本が陳列されていました。外国からの観光客や教師に引率された小学生のグループも訪れています。私もカメラを肩に館内を回りました。フラッシュなしで撮影が許されていたのはラッキーなことでした。

文豪ユゴーは数多くの作品を残していますが、展示品の中で一番多かったのはやはり『レ・ミゼラブル』に関連するものでした。なかでも目についたのは記念館の入り口に貼ってある「レ・ミゼラブル」の公演のポスター、テナルディエ夫妻にいじめられ続けた幼いコゼットが、大きな水ガメを両手で抱え水を汲みに行く挿絵や彫刻像でした。

遠く母親から離され、奴隷のようにこき使われていた彼女は、読者の心に深い

同情心と憐憫感を生みだしました。と同時に、そうしたことをさせる人間への憎悪に似た感情をも創り出して、後に続く物語の効果的な伏線（ああ、ここにつなごうと思っていたんだと思わせる事件などですね）となっていたのです。

ユゴーと妻のアデル、そして4人の子どもたちがこのアパルトマンの2階の部屋に越してきたのは1832年のことでした。『ノートルダム・ド・パリ』などの作品の成功でユゴーはパリの文壇で押しもおされぬ作家となりましたが、一方で妻アデルの不実の発覚で心を深く傷つけられます。

やがて、自作の舞台で端役を演じた若い女優ジュリエット・ドゥルーエと出会い、二人は深い恋に陥った。そんなジュリエットの肖像画も展示されているのも、いかにも“人間ユゴー”の一端をかいま見せてくれる思いがしました。

作品の中では当時のフランスを取り巻く社会情勢や民衆の生活も、物語の背景として詳しく記載されています。

1851年に起こったクーデターでユゴーは亡命を余儀なくされました。イギリス海峡のガーンジー島に居を構えここで執筆に身を捧げ1862年に『レ・ミゼラブル』を書き上げた。1870年に亡命先から戻ると上院議員にもなった。1885年に83年に及ぶ生涯を閉じたが、人々は凱旋門からパンテオン（いわゆる教会・神殿ですね）まで行進し国葬を執り行ったといえます。

こんなユゴーの生涯が刻まれた記念館から、私は翌日、ユゴーと家族が一時期、住んでいたというパリ郊外のピエーヴル市にある「ヴィクトル・ユゴー文学記念館」も訪れました。ユゴーの胸像、美しい芝生と緑の林に囲まれた白亜の館には、ユゴーの若き日、亡命の日々、政治的な活動などの資料や直筆原稿などが展示されていました。

そこで私は『レ・ミゼラブル』の中でも終盤の山場の舞台「パリの下水道」への入り口をそのフランス人館員に尋ね確認しました。

サッと調べて出てきた番地や公開時間帯を彼から教わると、私はその足で現場へ向かったのです。

場所はセーヌ川沿岸にあるオルセー美術館から1キロほど下流でしたが、教えてもらった住所を頼りに下水道の入り口を探すもなかなか見つかりません。

そこで再びオルセー美術館まで戻った私はそこで客待ちをしていた観光用の人力自転車を活用したのです。（浅草の人力車みたいなものですが、人力車ほど優雅また豪華ではなく、そのかわり自転車で引っ張るので足で駆けるよりもす

っと早かったですね)

運転手は 180 センチをゆうに超えた背の高いお兄さん。大学生の角帽みたいな黒い帽子をかぶり、片言の日本語をあやつる愛嬌のよい彼は地理にとっても詳しく、観光バスや一般車の間をぬぐい、降りかけた雨の中を自在に走り、なんとか**目的地の下水道入り口**に着きました。

ところが――

すでに下水見学のための受付は閉まっていたのです。午後 5 時 20 分。ネットで調べた公開時間は午後 6 時までとあった。でもその担当者によれば、「入ってから出るまでに時間がかかる。だからもう受付はできない」のだと言うのです。いかにもフランス的、いやフランスの公務員的と言ったらよいのでしょうか……。翌日はもう帰国でした。残念ながら、私は下水道訪問はあきらめ、周辺や下水への入り口の“証拠写真”を撮るにとどめたのでした。

(5 枚の写真の簡単な説明)

『レ・ミゼラブル』のなかでは、ジャン・ヴァルジャンが、市街戦で重傷を負ったコゼットの恋人マリユスを背負い下水道に逃げ込みます。ある専門家の計算によると彼が潜り抜けた下水道の長さは 4.3 キロになるという。潜り込んだのは昼間だったが、よろめき出てきたときは夜の 9 時ころになっていた、と。

ユゴーは当時のパリの下水道を「**巨獣のはらわた**」と形容しジャン・ヴァルジャンの苦闘を詳細に描写しています。

「ジャン・ヴァルジャンは一つの地獄からもう一つの地獄へ転がり落ちたのだ」
「こうした未知の世界では、思い切って踏み出していく一歩一歩が、最後の一歩になるかもしれなかった」

「モンマルトル下水道が大下水道につながる地点には……」

「もうすっかりできあがった墓の中があるだけで、ふたをかぶせたぬかるみの中で死ぬしかないのだ！汚物のおかげで……」

「水は脇の下まで来ていた」

……こうしてやっとたどり着いた下水道出口で宿縁のテナルディエと出会い、物語は大団円に向かって展開していくんですね。

ここで再度、物語全体の筋をたどってみましょう。

(物語に沿ってご紹介するいくつかの挿絵は、1879 年-1882 年に出版のユグ版 (Édition Hugues) のために画家**エミール・バヤール**によって描かれた**木版画**です)

獄を出たばかりのジャン・ヴァルジャンに人間更生への手を差し出したミリエル司教です

コゼットは5歳にもならないうちに女中となった。

コゼットを利用しこき使ったテナルディエ夫妻

出獄したジャン・ヴァルジャンはマドレーヌと変名。徳行を積み地方都市の市長になるが、彼の名を負わされて無実の罪になった男を救うために名乗り出て再び獄につながれる。その後、偶然に脱獄できた彼は、貧しい少女コゼットを悪漢テナルディエから救いパリに隠れる。

美しく成長したコゼットは青年マリユスと愛し合うようになる。市街戦に参加し重傷を負ったマリユスを肩に背負ったジャン・ヴァルジャンを下水道の出口で待っていたのはテナルディエだった。警視ジャヴェールはこれまで追及してきた“犯罪者”の崇高な精神に打たれ、神と法の正義の間に進退きわまって自殺する。

コゼットと結婚したマリユスが駆けつけた時ジャン・ヴァルジャンはすでに死の床にあった。

小説は読む人によって異なる感想があって当然ですが、以下パワーポイントで映し出される台詞や文は、私が深く感銘を受けた表現や描写です。

私が一人で話していると、どうしても単調になりますので、ここからはご出席の皆さまにご協力いただき、画面に映された文章を読んでいただきたくお願いしたいと思っております。

物語の流れに沿っていますので、お一人が一画面。合計で20画面ほどで全体で15分間くらいになるでしょうか。前列の方から順繰りに読んでいただきたくお願い申し上げます。大丈夫でしょうか？

もちろん強制ではありませんので、文字がよく見えないとか、こうしたことは苦手だ、という方はパスしていただいても結構です。

昔、作品をお読みになった方、またミュージカルや映画をご覧になった方は懐かしくその場面を思い出していただき、作品に触れるのが初めての方は世界的な名作「レ・ミゼラブル」の概要だけでも知っていただく機会になれば幸いです。

翻訳はフランス文学翻訳の第一人者、辻とおる氏の訳からの引用です。

「レ・ミゼラブル」 ヴィクトル・ユゴー

(辻昶訳 潮出版社から)

それでは最初の方からよろしく申し上げます。全部で5巻です。まず第1巻か

ら。(短い文や長めの文が混じって、文字の大きさも揃っていませんがご了承ください。最初にあるページ数は読まなくて結構です)

第1巻

p97 牢を出たジャン・ヴァルジャンが宿と食事を求めてさまよい歩く・・・
「刑務所は宿屋じゃない。つかまるんだな。そしたら入れてやるよ」(出獄した彼に投げかける市民の声。社会はこんなものかもしれません)

p120 ジャン・ヴァルジャン、司教に会う。(この所は最初に詳しく述べました)

p157 釈放は解放にはならない。徒刑場からは出ても、前科からは抜け出せない。(ジャン・ヴァルジャンの難しい出獄後が続きます)

p248 コゼットがごく小さいうちは、ほかのふたりのなぶり者だった。すこし大きくなりだすとすぐに、つまり五つにもならないうちに、彼女はこの家の女中になった。(ここからテナルディエ夫婦によるコゼットの利用と虐待が始まるんですね)

p257 マドレーヌ(ジャンバルジャンの別名です)——彼が金を儲けるのを見ると、みんなは、「あいつは商売人だ」と言った。金を撒くのを見ると、「やつは野心家だ」と言った。名誉を辞退するのを見ると「ペテン師だ」と言った。社交界との交際を断ると「不作法な奴だ」と言った(事業家、また市長として一生懸命に市民のために働こうとしているマドレーヌ(ジャン・ヴァルジャン)に対しての言葉です。物事を自分の都合のよいように解釈する、現在にも通ずる一般市民の傾向でもあるでしょう)。

p268 オオカミの生んだこの犬に人間の顔をつけると、ジャヴェールになる。ジャヴェールは監獄の中でトランプ占いの女を母として生まれた。

p350 シャンマチユという人物がジャン・ヴァルジャンに代わって捕らえられた。

(執拗に最後までジャン・ヴァルジャンを追いかけた人物の描写です)

(ジャン・ヴァルジャンの良心の葛藤が続くが、最後には裁判の場に自ら名乗り出て再び投獄されることになるんですね)

(第1巻、登場人物の際立った特徴が浮き彫りにされていて、人間の良心とは、善とは悪とは・・・と最初から読者を引き付けていきます)

第2巻

p22 1815年6月18日・・・ワーテルローの敗戦

p114 コゼットはテナルディエ家にとって二重に利用価値があった。つまり、

母親に送金させていたし、娘の方は働かせていたのである。(コゼットが
いかに虐待され奉公を強いられたかとの詳細な記述が続きます → そ
れがひどければひどいほど読者の同情を呼び、ジャン・ヴァルジャンの崇
高な人間性が浮き立ち、その落差が読者を深く引きずり込んでいく小説
の技巧に感銘します！)

p128 (ここだけは私に読ませてください。テナルディエの女房の言葉です)

「とっととお行きったら！」とかみさんが怒鳴った。

コゼットは外に出た。

戸が閉まった。

(ぴしゃりとした短文で情景を連想させる「文章の書き方と技巧」に私も
学びたい思いでこの部分読ませていただきました)

p183 ジャン・ヴァルジャンはコゼットを 1500 フランでもらいうける。

p208 彼は 55 で、コゼットは 8 つだったから、生涯に味わったかもしれな
いすべての愛情が一つに溶け合って、ここでは、えもいわれぬほのかな
光のようなものになったのだ。

p236 ジャン・ヴァルジャンの変わっているところは、いわば二つの袋を持
っている点にあった。一つの袋には聖人のような考えが入っており、も
う一つには徒刑囚の恐ろしい才能が入っていた。

p364 ジャン・ヴァルジャンとコゼットが修道院で正式に居られるようにな
るための芝居、死者に代わり棺おけの中に入り墓場から抜け出す手
法・・・(シェクスピアの『ロミオとジュリエット』にそっくりな手法
が出てきます)

第 3 卷

p16 パリは野次馬にはじまり、浮浪児におわる。p36 パリはいつも歯をみ
せている。どなっているか、笑っているかだ。(面白いパリの形容の工
夫に感銘します)

p82 1827 年にマリユスは 17 になった。

p164 無一文のマリユス・・・・・・

p166 弁護士になったマリユス・・・・・・

p193 美青年になったマリユス・・・・・・

(マリユスの成長を綴っています。以下、この巻の続きはまとめにくかったので
私の読みで紹介します)

p198 ベンチに座る美しく成長したコゼットの登場とマリユスが惹かれてい

く描写が続きます。

p258 「みじめな人たち」(シ・ミゼラブル)との言葉がここで初めて登場します。

p331 テナルディエとジャン・ヴァルジャンの出会いと決闘・・・その場に居合わせたマリユスの懊悩。やがてそこにジャヴェールも再登場します。

第4巻

p13 1831年と1832年という、七月革命に直接つながる二つの年は、歴史の中でも一番特殊な、一番目につく時期の一つである。p17 王政復古はたおれた。(当時の政治情勢も綴っているのが物語に現実味を加えています)

p115 一緒に外の出かけると、コゼットは、彼の腕にもたれかかり、得意で、うれしくて、胸をふくらませていた。ジャン・ヴァルジャンは、こんなにひたすらな、彼だけで満足している愛情のしるしをみると、考えがとろけて喜びになってしまうような気がした。

p122 コゼットは暗闇の中にいたが、やはり暗闇の中にいるマリユスと同じように、燃え上がる準備ができていた。

p187 一度の接吻、ただそれだけだった。

・・・若い二人の恋が深まっていく描写が続きます。

p281 エポニーヌが仲立ちしてマリユスをコゼットの住む家の案内をしていく——恋する男を恋する女の住む石造りの家の方に押しやるあの力に引っ張られ、とうとうロミオがジュリエットの庭にはいったように、コゼットの庭にはいりこんだのだった。(エポニーヌはテナルディエ夫妻の娘です。同じくシエクスピアの引用ですね)

p490 マリユスに淡い恋心を抱いていたエポニーヌが内戦の中でマリユスを守ろうとして銃弾の犠牲になった。

p522 マリユスの手紙を持ったままのジャン・ヴァルジャン。この手紙をこのままポケットにしまっておきさえすればよい・・・(ここでもロミオとジュリエットの行き違いと似たような設定が出てきます)

第5巻

p101 「共和国の名において、バリケードを救ってくれた人が二人いる。マリユス・ポンメルシーとあなただ」「わしはほうびをもらう値打ちがあると思うかね?」「もちろん」。(「あなた」というのはジャベールを指しています。ジャンバルジャンがそのジャヴェールをもらいうける。そし

て射殺すると見せかけて追われている者が追う者を解放してやる。その崇高な人間主義にかたくななジャヴェールの心も溶けていったのですね)

- p231 ジャヴェールの精神的懊悩・・・・
- p235 人間よりも天使に似た徒刑囚・・・・
- p239 ジャヴェールはジャン・ヴァルジャンを釈放してしまった。見て見ぬふりをして・・・
- p240 社会は完ぺきではないし、権威もぐらぐらゆれることがあるし、不変なものでもくだけることはある。(矛盾を抱えた社会の仕組みや構造・・・現代にもそのまま通じているのではないのでしょうか)
- p325 コゼットとマリユスが結婚します→ 新婚の初夜が描かれますが、肉体(つまりセックス)の描写は一切なく、魂の昇華を綴っています。(近年の売れっ子作家の作品のような、あからさまな性の描写はなくても、十分に読者の心を引っ張っていけるとところに本当の文学としての力があることを改めて思うところです)
- p383 「この子の幸せが私の一生の目的だった。いま神は、私の退場の書類に御署名になってもいいのだ。コゼット、おまえは幸せになった。私の役目は終わったのだ」
- p420 お金をせびりに来たテナルディエが結果的にマリユスのジャン・ヴァルジャンに対する誤解を氷解させる。(マリユスの悔恨とジャン・ヴァルジャンへの感謝。ここで読者は心にわだかまっていたものが一気に溶け溜飲を下げる。物語の大団円です)
- p449 ジャン・ヴァルジャンが亡くなる寸前の言葉。「コゼットに二本の燭台を形見に贈る」とあります。(ここで物語の冒頭、ミリエル牧師から受け取った燭台が最後にコゼットに渡されきちんと結ばれるのですね)

皆さまには強引だったかもしれないお願いをしましたが、なんとか最後まで終わることが出来ました。読んでいただいた皆様には心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

ここで作品の出版に関する逸話をご紹介しますと：

発売当日は長蛇の列ができ、本は飛ぶように売れました。ユゴーは作品の売れ行きを心配し出版社に「？」とだけ記した問い合わせの手紙を出した。「売れている？」との問い合わせだった。出版社からは「！」とだけ記された返

事を受け取ったという。「売れて、売れて！」を意味したと思われるこれらの2通は、世界一短い手紙であると言われています。

そしてユゴーの数多い名言の中から最も知られている言葉の一つをご紹介しますと：

海よりも広いものがある。それは空である。空よりも広いものがある。それは人の心である。 人の心は海よりも空よりも深く無限に広がっている・・・
分かり易い箴言ですよ。

タイトルの『レ・ミゼラブル』は日本では『あゝ無情』と訳されていることが多いですが、正確に日本語に訳すとすれば「みじめなる人々」「哀れな人々」といったところでしょう。

ジャン・ヴァルジャンが投獄された理由は、貧困から食料を盗み出したというものです。そんな彼がいかにして人生を生き、そしていかにして一人の少女を守り、育て、愛していったか。彼の生き方が読者、映画を見る人、舞台を鑑賞する人に感動を与えてくれるのです。

ご紹介した二つの作品は基本的にはパリが舞台ですが「ドン・キホーテ」のラ・マンチャの風車が並ぶ平原、「赤毛のアン」のグリーンゲイブルズの家、「ロミオとジュリエット」のイタリア・ベローナにあるキャプレット家の館や「ハムレット」のデンマークにあるクロンボー城のような具体的な場所はありません。パリの市街全体が作品の舞台だったとも言えるでしょう。その意味で、ここでパリ滞在中にカメラに収めた何枚かの写真をご紹介します。

凱旋門に向かう広い道路。いつも車で混雑していました。

いかにもパリらしい街路に広がる商店やレストランの並びです

まだコロナもない時だったので2階建てのバスはほぼ満席でした。

曇り空にそびえるエッフェル塔（東京タワーとどちらが高いかご存知ですか？）エッフェル塔は312メートル、東京タワー 333メートルで東京タワーが21メートルほど高いんですね。

エッフェル塔の一番下の部分。やはりデザインが洗練されていますよね。

パリは愛の町。セーヌ川に架かる橋の欄干に付けられた何万という鍵。恋愛が実を結ぶのを願って、とのことでした（3枚）

ノートルダム寺院。残念ながら火災で崩れてしまったですよ。

セーヌ川の遊覧船に乗って川の真上と両側の景色もカメラに収めました（2枚）

さすが芸術の都パリ。車が通る橋の下にもこんな彫刻がありました（3枚）

セーヌ川の中州にある島です。市民や観光客がくつろいでいました（2枚）

雨上がりのパリの空の下の観光船の後部からのカットです。左側に美しいビル群が並んでいます

パリのオペラ座のすぐ並びにはユニクロが進出していました（2枚）

有名なパリのオペラ座です。

ここで最後にこのオペラ座が舞台となった「夢のような話し」をご紹介します私のお話を終わりたいと思います。特に男性諸氏にはわくわくドキドキする話になるかもしれません。

「ああ、ハグできなかったマドモアゼル！」

パリに到着した最初の日の午後5時ごろ、少し時間があつたのでオペラ座で公演中の舞台を觀賞することにしました。劇場はパリのほぼ中心にあります。

急な思い付きだったので予約席券はありません。入り口で自由席券（100ユーロ、約13,000円）を買うと、空いていると思われる席のところに行きました。隣の席には若くて美しいフランス人女性が座っています。そこで私は英語で尋ねました。

“May I take this seat?”（この席に座ってもよろしいですか？）

彼女も私の英語がわかったらしく“Sure, of course”（ええ、どうぞ）とニコリとうなずきました。フランスでは意外に英語のできる人が少ないです。英語ができてても自国語＜フランス語＞への誇りから話そうとしない人もいます。

親しみを感じた私はこの機会に、これから訪問しようとする二人のフランス人作家（ビクトル・ユゴーとアレクサンドル・デュマ）の作品の舞台や場所について相談しようと思ひ話しかけました。「ジャン・ヴァルジャンがコゼットの恋人であり、内戦で傷ついたマリウスを背負って逃げた下水道はどこだったのか」聞きたかった。

と、彼女は言ったのです。

「もうすぐ幕が開くから時間がありませんね。あなたの訪れようとする作品については私もある程度は知っていますから参考になるお話をできるかもしれま

せん。よかったら自宅にいらっしゃいませんか。家はここからそんなに遠くありませんから」

“なんとラッキーな！”

私はオペラ座を出ると胸を躍らせながら彼女のあとについていきました。確かに家はすぐ近く、瀟洒なマンションの3階でした。「よろしかったらどうぞ」。部屋に入ると彼女は親切にもワインを差し出してくれ、言ったのです。「ゴメンナサイ。少し汗をかいてしまったからちょっとシャワーを浴びさせてね」

そう言うと彼女はバスルームに入っていました。応接間にひとり残った私はワインを口にしながら彼女の出てくるのを待っていました。10分ほどして彼女がバスルームから出てきました。

と、なんとという驚き！！

彼女はうすいピンク色のネグリジェをまとっただけなのです。スレンダーな美しい身体が透き通って見えてきます。私はショックでどこに目をやってよいかわからず、ソファに座ったまま動きがとれずにいました。

と、彼女はぐんぐん私に向かって歩いてくると両手を広げたのです。私をハグしようとしているのです。

「ここで応えなければニッポン男児の名が捨たる」。私は彼女のあまりの美しさに見とれ我を忘れたように立ち上がると、思いっきり彼女を抱きしめようと両手を広げました。ところが・・・

——その瞬間、私は夢から目が覚めたのです。時差で朦朧とした目をこすりながら、ホテルのベッドの上で枕を抱いていたのでした。パリと東京には8時間の時差があります。パリの夕方の5時は東京の真夜中の1時になっていたのです。

以上で私の話は終わらせていただきます。

長時間のご静聴ありがとうございました。